



## “農村”がない日本でいいのか!?

今年は雪が多い。このところよく新聞等で見かける活字がJPCZで、日本海寒帯気団収束帯だとか。大陸からの冷たい風が北朝鮮と中国国境にある山岳地帯で分かれたものが合流し、日本で短時間に降雪量を急増させ、かつ広い範囲にわたって降雪を長引かせたりするようだ▼冬の雪国の生活はさぞ大変と推測するが、「でもな、それがこの地で暮らす我々にとつての日常なのであつて、ここにはこの楽しみがあるし、けつこうおもしろく、かつ、にぎやかにやっているのだから、あなた方が同情するには及ばない。」と“百姓”は語る。そこには「コタツ文化」があり、漬物を食べながらお茶を飲み、一緒の話題を楽しむ暮らしがある。12月9日の「耳明け」、28日の「松迎え」、30日の餅つき、元旦には「若水」を汲んでの神様・仏様にお供えし、自らの家に宿る16か所の八百万の神様へのお供えと祈り。15日は「小正月」となる▼冬を含めた四季の暮らし、土や田んぼの話し、放牧養鶏、こだわりや生き方。これら豊かな農村文化を綴りつつ、厳しい農業経営と農村の実情を訴えているのが『生きるための農業 地域をつくる農業』（大正大学出版会）で、山形県長井市の“百姓”こと菅野芳秀さんの近著である。食料安全保障強化を標榜しながら、農業の大規模化に偏重した農政で生産費を賄えない米価。小規模農家は「後継者へのタスキ渡し」がかなわず、農村は崩壊過程にあることを訴える▼今、SNSでこの菅野さんが中心となつて「令和の百姓一揆」を3月下旬に決行予定との情報が拡散している。「“百姓”は生き方」だとする菅野さんが抱える問題は、実は消費者、国民の問題でもある。菅野さんの呼びかけにどう対応するのか、消費者、国民も同様に生き方が問われる。菅野さんの叫びにしっかりと耳を傾けてほしい。

(土着菌)